通信第六十八号　仏法僧の無きところ

　九月は過密日程のためか後半は体調不良でした。ヘル二アと前立腺肥大は治まりましたが夏風邪を引いてからが止まらず胸も気になり生活のリズムが崩れてしまいました。体調が悪いと気持ちも滅入ります。これも何か如来様からのご催促でご廻向があるに違いないと思っていましたが一向に事態はよくなりませんでした。保健師だった嫁の奈津美さんから助言を頂き、ようやく重い腰をあげて九月二十八日お医者に行きました。最初の医者さんは休診日でした。次の医者さんは私が「胸の痛みが気になります」と言ったので、「レントゲンのあるところへいったほうがよいですよ」とのこと。次の医者さんに行くと「昼からは担当医がいません」四か所目の病院でコロナやインフルエンザなどの問診のあとようやく診て頂けました。女医さんで聴診器の当て方が丁寧です。のどを診て頂き、「片方ずつ鼻を抑えて下さい」とのこと、原因がわかりました。鼻水がのどに落ちているためでした。レントゲンは必要ないとのこと、原因が分かりました。お医者さんの見立てや受付の対応など様々あることを勉強しました。

　気持ちが沈む中で、大石先生の中でご書信に向いました。そこで私が厳しく問われました。

　　　本願に目覚めた時の心境はどうなのか。私は僧とは名ばかり。形は僧衣をまとい、手を合わせていても、人を見下げています。人が転んでも、口では「お気の毒に」と言っても「そのくらいのことはあるよ」と、あざ笑う根性です。でありながら、手は合掌しているのです。仏法を聞いて、頭で理解しても、少しもありがたくないのです。そのくせ口ではありがたそうな話をしているのです。仏様を売り物にしているのです。仏様の頭の上に足をおいて、我執の中であぐらをかいているのです。本願に　目覚めたということは、この私の姿に気づかされたことだったのです。

その時、おのずから手が合わされたのです。口にお念仏が出てくださったのです。私が手を合わせたのではありません。仏様のご本願によって、合掌せしめられたのです。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　書信第六十二信八頁

　さて、私の自覚は大石先生のようになっているだろうかと問いかけられました。書信のこの文章の直前にはという竹に石があたって香厳という禅宗の僧侶が目覚めたという逸話が書かれています。生まれる以前の絶対界との出遇いです。自分の言葉で（言）えということにも厳しく問われました。

　釘が磁石から離されたように、力の出ないうつろな状態が一週間くらい続いたでしょうか。以前には感動したことや人にも説いたことが無味乾燥の如く味わいが出て来ません。どうしたことだろう。夏の疲れのためか、もうこういう停滞することはおこらないだろうと思っていましたがあがくほどどうにもなりません。

　ふと「浄土論註」のことが浮かびました。

七地までのこちらからの方向の菩薩は作心（分別心、人間心）がある。よって人間からはどうにもならない七地沈空の難というむなしさに沈む関所が出て来る。この関所を超えるには、「かの浄土の仏を見たてまつれば、まだ浄心を証せぬ菩薩も八地以上の平等の法を得しめられるのである。～～～この菩薩は、安楽浄土に生れたいと願えば、たちどころに阿弥陀仏を見たてまつる。（ただし、人間から浄土に生れたいという願いは出てこない、願わすのは阿弥陀仏の親心の大慈悲からである）（）内は筆者注。阿弥陀仏を見たてまつるとき、八地以上の菩薩と（つまるところ）身が等しくなり、法も等しくなるのである。龍樹菩薩とか世親菩薩方が彼の浄土に生れたいと願われたのは、ひとえにこれがためである。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　解読浄土論註・下巻・九七頁

　なぜ、ややこしく、七地とか八地とこだわったり、十九願、二十願、十八願と日常の言葉には無いことを経典にくどくどと説かれているのでしょうか。おおよそ日常生活とは関係のないことのようです。しかし、人間の生き方や日常生活に明らかに出て来ることなのです。自分でもわからない魂の一番奥にあるものが一番表に出て来るからです。だからあらゆることが出るべくして出ているという事でもありましょう。

もう一つ関連した大切なことが出ています。

菩薩七地（人間の努力の限界）の中において大寂滅（さとりの境地）をうるのであるが、そのときこの菩薩は上に求むべき諸仏を見ず、下に救うべき衆生を見なくなって、仏への道を捨てて、止まってしまう、卒業してしまう。その時もし十方世界の仏の偉大な力によるはげまし

がえられなかったら、たちまち力をなくして、声聞、縁覚のさとりと何ら変わらなくなって救済の力がなくなってしまうのである。しかるに、菩薩が安楽国（浄土）に往生して阿弥陀仏を見たてまつるなら、このような難関はなくなるのである。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　解読浄土論註・下巻・１０２頁（筆者意訳あり）

　昨年の十月に住職を譲り、法喜さんと本願道場を巡る旅が始まり、本も冊子を含めて四冊が発行され、リモート法座が月四回、ユーチューブも三〇〇本以上出ています。私はいつの間にか人かどの先生にでもなった気がしていたのです。

　口ではお師匠様のお陰とかご本願のお陰と言いながら、思いながら深いところでは俺がしている、できているという私の正体が照らし出されて来ていたのです。八地以上の境地に我が成り上がって、が利他行していくとなっていたのです。仏様の頭の上に足を置いて偉そうに仏様の仕事を自分がしたように横取りして平然としている大罪人、極重悪人とは私のことだったのです。大石先生のご書信に照らされたはずです。

　人間世界、三界を超えた仏の浄土、ご本願の世界を自分の思いの世界に引きずりおろして、解釈したり利用できるとしていたのです。それはお月様の上で火を焚こうとしているようなものです。苦しく、不安になったはずです。釘が磁石から離されてどうなったか。大石先生もいない。どこに道があるのか。この先どうなるのかわからない。という世界に落とされました。

　浄土の菩薩の四種功徳の四番目に、があります。

仏、法、僧の無いところにおいて、三宝の功徳の大海を住持し荘厳して、く示して如実の修行を衆生にらしむ。

　さて、この仏、法、僧ましまさぬところはどこか。あきらかに現代社会だろうとずっと私は思

っていました。このたびの落ち込みのご因縁で、仏、法、僧ましまさぬところはこの私自身の身

心、生命のところであったと知らされました。真実であるから、不思議に元気が出てきました。

　大無量寿経のおわりに

来るべき世に（経も教えも道を求むる人もなくなってしまう）せんに、我慈悲をもってにこの経を留めて止住すること百歳せん。

　世の中がどうなろうと、私が生きているあいだは願いに生きる者になろうと思っていましたが、実は真反対でした。私にはそんな尊い願いは微塵もなかったのです。私自身が経道滅尽のすがたであったのです。願いに生きておられるのは法蔵菩薩様でありました。

　十月に入り、如来様からの新たなごを受けて体調も回復してきました。月末にはリモート法座の冊子が発行される予定です。ご縁の皆様に読んで頂ければ幸いです

令和五（二〇二三）年十月初旬

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　常照拝